テルトゥリアヌス 洗礼について

- 第一章：導入部 ― 論考執筆の端緒
  - カイン派の異端が自分の教説により私たちの水の洗礼を破壊している
    - カイン派の女性宣教師が洗礼を否定した
- 第二章：神の業の単純さ、肉ののとっての贈答の石
  - 神の業が実行される際に、実際に目に見えてくるものは単純さほど入間のとを苦笑たせるものは他にない
    - 優美さこれといって竈えず、なんら改まった仕掛けもなく、金銭の授受さもなしに、水の中に浸りふまれ、さして奇麗になることもないまま、再び水の中から出てくるだけなのだから
  - 沐浴によって死が消し去られるということは驚くべきことではなかろうか。
    - 一切の驚嘆を超え出ているのではないとするなら、それは元々、神の業にふさわしいものなのであろうか。不信仰は、単純なものは空虚とみなし、偉大なことは不可能なこととみなして驚く
- 第三章：神の働きの手段として選ばれた水との理由、創造におけるその卓越性
  - 命題をめに留めながら、私たちは水によって生まれ変わるということがいかに愚かしく、不可能であるかを論じようではないか
    - 水は、世界のすべてに先立って、まだ未完成なかたちの状態で提供され、神の許に休息していたもののなかの一つであった
- 水を区分することによって、神は天の中央に支柱を据えられたのであり、水を引き離すことによって、乾燥した地を拡げられた
- 人間自身の形成の業もまた、水と結びついて完成された。土から取られた素材であったが、湿って水気を含んでいるものでなければ適切ではなかった
- 第四章：原初の水の上に漂う洗礼の予型としての神の霊、聖化の伸介とされた水
  - それは神の霊であり、原初の時に水の上に漂っていたが、その後も水の表面に影響を与え続けるであろう
  - 聖なるものを上に漂わせていたのは、当然、その聖性を与えられ、水の本性は聖なるものによって聖化され、それ自身も聖化するカを持つ
    - その頃が一つであっても、原初の水によるのではない、種は多数あるのであろ、しかし頭の もつ属性は種の中に溢れ出る
    - それゆえ、海あるいは湿め池の中で、川や泉の中で、凍や浴槽の中で洗礼を受けようともなんの区別も存在しない
    - すべての水は、原初の特権の幸久に、神への呼びかけにより、聖化する（sacramentum）を継続して持っている。霊はただちに天から降ってきて、水を聖化しながら、その上にとどまり、水は同時に聖化する力をも吸収する
      - 水はある程度まで磨ぎ力を与えられ、霊は水の中で肉体におけるように洗い流され、肉は霊におけるのと同じように浄められる
- 第五章：異教徒による水の使用、ペトサイダの池に現れた天使の予型
  - 霊的なものの潜在の力を理解することに無知である異教の種族は空虚な単なる水によって自らを欺いている
    - 水の本性自体が浄化の予感を抱かせるのだとすれば、神の権威を通すことで、どんなにか水はその奉仕に役立つことであろう
      - 私たちは悪魔の業を認める。彼らもまた、自分たちの領分において洗礼を行っている。そこにはどんな類似性があろうか
        - 汚れている者が浄め、破壊者である者が自由を与える。彼らは神の競合者の傍らにいながら、神の幕柝に従えたとを渇望し信じている
          - そこには原初に汚れた諸霊が姿を消りながら水の上を漂うのである。つまり、それらはすべて、有害な霊の力によって起こる
- 神の聖なる天使は、水が救済に制御するように手助けするが、悪の天使のほうは同じ元素との取引を人間の破滅に用いているのだなどと、人が信じないようにするため
  - ペトサイダという池に天使が現れて、喋いていた人々がもう喋くのをやめることになっていた。このような肉体の治療は、霊の治療の予型を示していた
    - 神の恵みは水と天使にますます強く付与されていたのである。その時々の健康に働きかけたものが、今では永遠の救済へと回復している。
      - 一人の人を一年に一度だけ解き放っていたものが、今では毎日、民衆を死による挟殺から守っている
        - このようにして、人間は神のために、以前には神の似姿であったはずの、その彼の類似へと再び復権される。神の霊を再び受け取るのだから
- 第六章：洗礼の先行者としての天使。洗礼の式文
  - 私たちが水の中で聖霊を身に受けたのではない、水の中で、天使の立ち合いの下に正しいものとされ、聖霊が降るための準備をするのである
    - 予型が先行していた、ヨハネが主の先行者であり、主のために道を準備した。このように、洗礼の天使が証人となって、続いて来られるであろう聖霊のために道を準備する
- 第七章：塗油について
  - 洗礼槽から引き上げられた後で、聖香油によって塗油されるが、アロンが七一セ一ゼ半で塗油された時以来、塗油を意味するクリストマという言葉から、彼らは塗油された者（クリストス）と呼ばれた。この言葉はまた、主の名に適用された、そして塗油は霊的なものとなった
- 第八章：按手について。大洪水と鳩の予表
  - その後で、聖霊を呼び出し、祝福を経て按手が行われる
    - ヤコブはヨセフから生まれた彼の孫たちの頭の上に手を交差させて乗せ、祝福した。そのとき すでに来るべきキリストにおける祝福を予告していたと言えよう
      - かつての罪の後、洗礼槽から引き上げられた私たちの肉に対しても効力をもつようにとの配慮によって聖霊の鳩が神の平和を携えて飛んだのである
        - 地上では、教会が箱舟の範型となっているのである
          - だが、世界は再び罪に立ち戻った。そのことによって、洗礼は好ましからざるも洪水と対照させられる
            - その結果、洗礼は私たちの警告のしるしとして受け入れられなければならない

- 第九章：紅海の予表と岩から流れ出た水
  - 水の聖性は、恵みの特権、規律における厳粛さ、予型の準備と予告としてどれほど利用されてきたであろうか
    - 民衆エジプトから追い出たとき、王を全軍とともに滅ぼしたのは水であった
      - つまり諸民族は水によって、この世界から解放され、それまで主であった悪魔の水の中で滅ぼされた
        - 岩がキリストであるとするのなら、私たちはキリストにおいて祝福された洗礼をそこに見出す
          - いかなる場合でも、水はキリストに役立つように、その働きに存在する
            - 彼ご自身が水によって洗礼を受けられた
              - 水の権能の最初の行使を婚宴に招かれたときに、水によって開始された
                - 第一〇章：洗礼者ヨハネの洗礼について
                - ヨハネの洗礼には、洗礼は天からきたものなのか、それとも地上から来たものなのか、という疑問が存在していた
                - 説教の場で、喉の乾いた人々を永遠の水へ招かれた
                - 彼は水の上を歩かれた
    - 水はモーセの杖によって甘美で有益な水へと変えられた。この水は「自分たちに離れずについてきた岩から流れ出した水である。
- ヨハネの洗礼は神から来たものであったと判断することができる。他方で彼は委任されたということについては、それだけの眼現を持っていなかった
  - ヨハネは洗礼者の義務を果たすために、主によって送られた。彼は天上のものを与えたわけではなく、天上のなものに仕えていた
    - 第一一章：「主は洗礼をご自分では授けられなかった」という反論への解答
    - ヨハネが先駆けとして洗礼を授けたように、イエスの弟子たちも代理者として洗礼を授けた
      - その当時、主の栄光はまだ完成し終わっておらず、受難と復活を通しての有効なる水浴は救えられていなかったので、キリストの洗礼が弟子たちによって授けられることは不可能であった
- 第一二章：洗礼は救済にとって必要であること
  - 主に敵対する者たちは主から洗礼を受けることを望まなかった。主に従った者たちは洗礼を受けた。
    - 彼らが従う主が「おまそ女から生まれた者のなかで、洗礼者ヨハネより偉大な者は誰一人いないと証言してヨハネを称賛されたとき、彼らは競争者と同じ者に立つことはできなかったので
- 第一三章：アブラハムは洗礼を受けずに神に気に入られた。洗礼は今では一つの律法である
  - 背信者たちは言う「洗礼は、十分に信仰を満たしている人々にとっては不必要なものである」
    - 洗礼の掟が定められ、その定式が命じられた
      - 主は言われた「あなたがたは行って民に教え、彼らに父と子と聖霊の名によって洗礼を授けなさい」
        - 自分は説教をするために遣わされたと言っている。説教することが初めであり、その後に洗礼は来るから
- 第一四章：洗礼を授けるために遣わされたのではないというパウロの主張について
  - 彼らは「キリストが私を遣わされたのは洗礼を授けるためではなく、福音を告げるためである」と言っているのではないか、と反論する
    - 第一五章：洗礼の一致。伊端的洗礼とユダ半人の洗礼について の説明
    - 私たちはただの一度だけ洗礼槽に浸り、そしてただ一度だけ罪が洗い流される
      - イスラエル（ユダヤ人）は毎日沐浴するが、それは彼らが毎日汚されているからである
        - 砂漠の聖者が沐浴しなかった理由か
        - 異端者たちは私たちの規律に属するものではない。彼らの交わりの宮殿自体が彼らが外部者であることを証言している
- 第一六章：第二の洗礼、つまり血の洗礼について
  - 主はすでに洗礼を受けておられるのに、「私は洗礼によって洗われなければならない」と言われた
    - 主は水によって洗われ、血によって来られたから
      - この後おこる迫害による棄教者に対する洗礼後の罪も赦免する「罪の赦しの秘跡」はまだ設定されていない
        - 第二の洗礼は、洗礼を受けていなかったときには、その代行を果たし、洗礼を失ったときは、それを回復する洗礼である
          - 殉教を契機としている
- 第一七章：洗礼授与の権限について
  - 信徒たちさえも洗礼権利が存在している。公正な理由によって受け取られるものは、また公正な理由によって与えられてよいから
    - だが、一般信徒に対しては、司教に与えられた聖務を自分たちの例に要求することなどしないように強く求められている
      - それを授与することについては同教が最高の権限をもっている。
        - このような女性たちは自己の手で、ただ一度だけ洗礼を授けるとしても
          - 女性たちの過度の熱情は戒しい野獣どもが生まれる華盟にならりかねない
            - 強く求められる緊急の場合には、あなたがそれを実行することで十分足りる
- 「パウロ行伝」のテクラの範例を女性たちが教え、また洗礼を授けることの資格を示すものとして援護している
  - この書物は自分で書き上げたアシアの司教がパウロへの愛からしたことだと告白したが、地位から退けられた
    - 女性が教えることを強硬に許そうとしなかったパウロが、権能を女性に与えるなどということは、信じるに足るだろうか

- 第一八章：洗礼は誰にまた、いつ執行されるべきか
  - 「軽率に誰にでも按手するな、また他人の罪に関係してはならない」
    - フィリポが安易に官官に洗礼を授けたとするなら、そこに主のご配慮が介在していた
      - パウロも早く洗礼を受けている。それは東の主人がパウロが定められた選びの器であることを認めていたから
        - 各人の事情や意向に応じて、さらに年齢に応じて洗礼の機会を遅らせることも有益
          - 未婚者たちには誘惑が準備されているので、彼らにも洗礼は延期されなければならない
            - 独身の女性たちは成熟するまでのあいだ、未亡人たちは、結婚するか、あるいは節制によって身を固め念さで延期されねばならない
              - 特に小児たちに関して言える。受洗が緊急を要するものではないのなら、当事者たちが死ぬことによって彼らの約束が捨てあられれることも可能である
                - 彼らが成長したときに来させなさい
- 第一九章：洗礼に最もふさわしい季節
  - すべての日が主の日なのであり、すべての時間、すべての時期が洗礼にふさわしい
    - 聖霊降臨は最も喜ばしい時期である。天使たちは使徒たちに「…特にペンテコステ（聖霊降臨）のときに戻られる
      - 過越しの日は、復活の日を提供している。その日に洗礼を受けることで、主の受難が実現されるから
- 第二〇章：洗礼の準備、その後の振る舞い、受洗
  - 洗礼を受け入れようとしている人々は、以前に犯したすべての罪の告白がともなわれる
    - 以前に犯した罪に対して、肉体と霊の礼賛によって償いを果たし、誘惑の攻撃に対して防壁を用意することになる
      - 洗礼の浴槽から新しく誕生した皆さんが、父である神に求めなさい。「求めなさい、そうすれば与えられるであろう」と、主は言われた
        - ある人は言う「私たちも洗礼の後、むしろ断食すべきではないか」。ただ、それには喜びが不可欠である
          - ユダヤ教の五旬祭の日に起きた聖霊降臨を祝う日、復活祭より五十日目
            - ユダヤ教の出エジプトを記念する祭日であるが、キリスト教会ではイエスの復活祭として祝う